

# 大学病院産婦人科において 診療参加型臨床実習を導入するための試みと課題



新潟大学医歯学総合病院  
総合研修部 医師研修センター/産科婦人科  
磯部真倫

# 診療参加型臨床実習とは？

学生がチームの一員として診療の役割の一部を担う

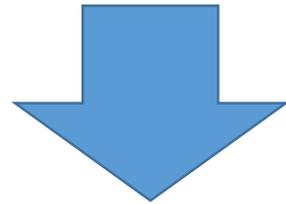
現場の医師とともに考える

一連の流れで診療に参加する  
(医行為を行うのみではない)

- × 採血のみ
- × 手術の縫合のみ

医療面接→診察→検査→マネジメント

**大学病院 / 産科婦人科**



**診療参加型臨床実習にしにくい**

# 大学病院が診療参加型実習にしにくい理由

- ① 各診療科にまわってくる学生が多い。
- ② 医師の臨床、研究、管理運営などの業務が多く、教育に割ける人員や、エフォートが不足している。
- ③ 紹介患者が多く、疾患の特殊性から学生に業務を任せることが困難である。
- ④ そもそも、教育の熱が不足している？

# 産婦人科が診療参加型実習にしにくい理由

- ① 女性の生殖器を扱う診療科であり、また先天異常などデリケートな問題を扱う診療科である。
- ② 内診などは学生が単独で行うことはできない。

**大学病院**

**産婦人科**

**診療参加型臨床実習**

# Agenda

1. 診療参加型臨床実習の導入の試み
2. 診療参加型臨床実習を増強するもの
3. 考察と今後の課題

# 新潟大学産婦人科 臨床実習

臨床実習Ⅰ（4～5年生） 10名 3週間  
産科 1.5週、婦人科 1.5週

臨床実習Ⅱ（5～6年生） 2名 4週間  
産科 2週、婦人科 2週

**診療参加型臨床実習導入のため  
まず行ったこと**

# 卒前実習係で何が診療参加型臨床実習にできるかbrain storming

- 医療面接
  - 診療録記載
  - 手術参加
  - プレゼンテーション
  - 診断書記載
  - 病棟回診
  - 患者搬送
- などなど

どの場面で診療に参加してもらおうか？

病棟

外来

手術室

# 医師の監督のもとで実現可能か？

時間的に

権限的に

環境的に

マンパワー的に

学内规则的に

# 新潟大学産婦人科 臨床実習

**臨床実習 I (4～5年生)      10名      3週間**  
**産科 1.5週、婦人科 1.5週**

臨床実習 II (5～6年生)      2名      4週間  
産科 2週、婦人科 2週

人数も多いので以下の2つをすべての5年生にまかせることとした。

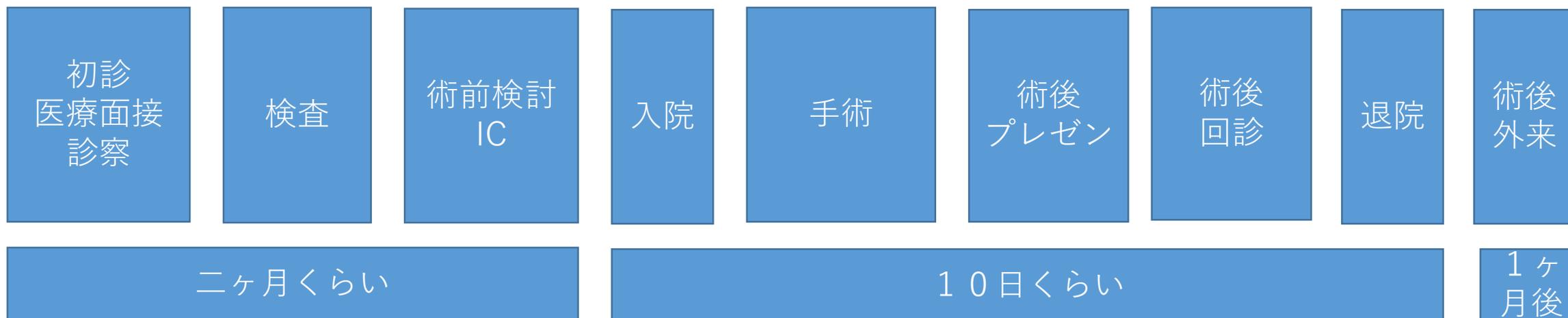
1. 手術の参加
2. 初診外来医療面接

人数も多いので以下の2つをすべての5年生にまかせることとした。

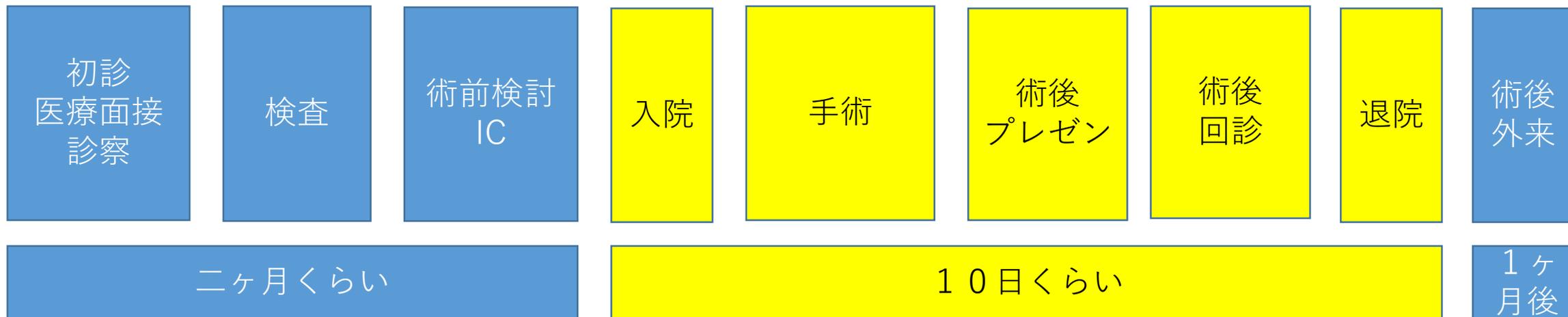
1. **手術の参加**
2. 初診外来医療面接

**手術で手技をさせることが  
診療参加型臨床実習ではない**

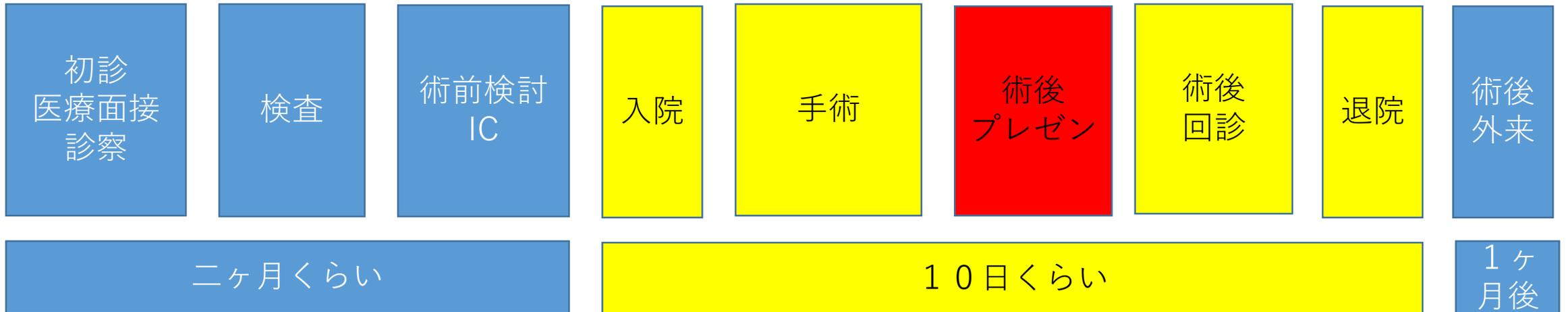
# 手術の流れのどの部分を任せると 参加度が高まるか？（実質10日の実習）



# 手術の流れのどの部分を任せると 参加度が高まるか？（実質10日の実習）

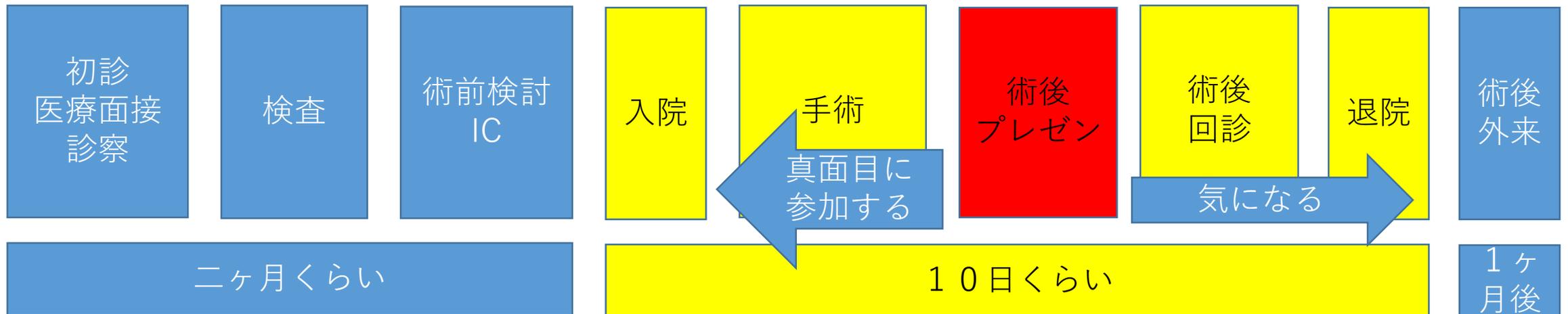


# 手術の流れのどの部分を任せると 参加度が高まるか？（実質10日の実習）



**予想外の結果**

# 手術の流れのどの部分を任せると 参加度が高まるか？（実質10日の実習）



# うまくいった理由

実際の医師が行っている業務を任せている。  
→プレゼンのためのプレゼンではない。

術後プレゼンを任せることで、手術自体の理解も評価することができる。

→前後の臨床経験の参加度が上がる

医師のフィードバックもある。

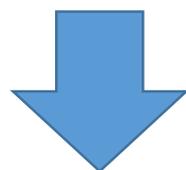
人数も多いので以下の2つをすべての5年生にまかせることとした。

1. 手術の参加
2. 初診外来医療面接

# なぜ初診外来なのか？

大学病院において紹介状がある患者とはいえ、確定診断がついていないことも多く、症候に近い状態で学生がアプローチできる。

→大学病院におけるファーストタッチである。



確定診断がついていない状態で患者を診る

# 初診外来医療面接を任せるにあたっての懸念点

- ① 医療面接についても婦人科特有の医療面接の知識が必要であり、臨床実習時に身につけていない。
- ② 女性の生殖器を扱う診療科であり、クレームが心配である。

# 初診外来医療面接を任せるにあたっての懸念点

- ① 医療面接についても婦人科特有の医療面接の知識が必要であり、臨床実習時に身につけていない。
- ② 女性の生殖器を扱う診療科であり、クレームが心配である。

# 準備学習の強化

## 導入

オリエンテーションで外来医療面接があることを説明する。

## 反転授業

婦人科特有の問診内容を知る必要性



実習初日に医療面接のレクチャー

自宅で研修医の模擬面接の動画、資料を見る

外来医療面接実習

予習動画



予習資料  
(google classroom)

# 初診外来医療面接を任せるにあたっての懸念点

- ① 医療面接についても婦人科特有の医療面接の知識が必要であり、臨床実習時に身につけていない。
- ② 女性の生殖器を扱う診療科であり、クレームが心配である。

# 産婦人科の専攻医教育の 問題も絡めて対応

(専攻医＝若手医師)

# 産婦人科における専攻医教育の問題点 (若手医師)

- ① 大学病院に紹介される、婦人科悪性腫瘍や先天異常、母体合併症妊娠は、頻度が低いために、市中病院では若手医師が初診で見ることがほとんどない。
- ② 大学病院で初診外来を持つことがない。
- ③ 若手医師が学ぶべき疾患の患者さんが、どのような症候で来院し、どのように診察し、どのようにマネジメントするのか経験する機会がほとんどない。

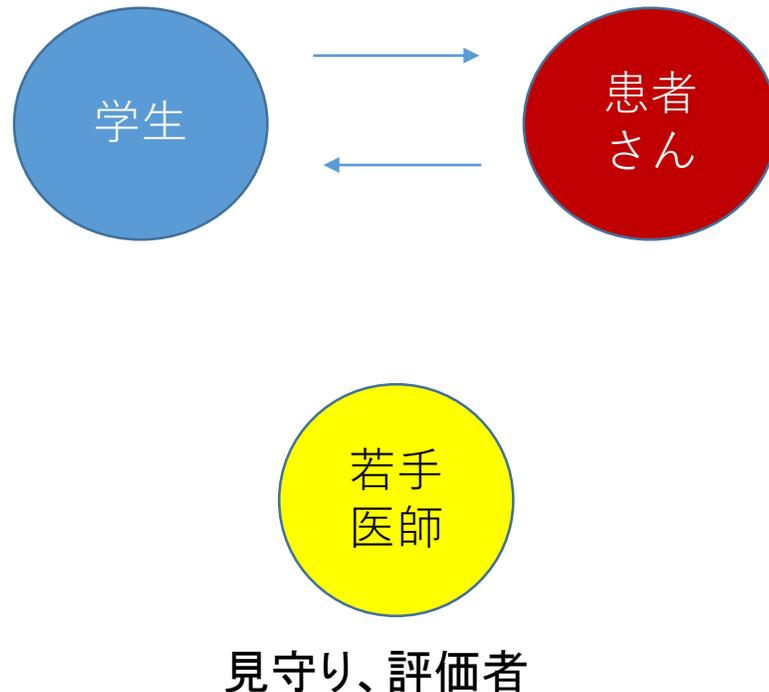
若手医師のニーズを満たしながら  
学生の診療参加型実習を行うために…



医学生と若手医師がともに学ぶ  
診療参加型の初診外来医療面接実習

## 実際の教育

- ① 学生は1人、専攻医は1人とする。
- ② 学生は医療面接を行う。専攻医は見守り、および評価者。
- ③ 学生はカルテに記載する。症例プレゼンテーションを行う。



電子カルテの記載

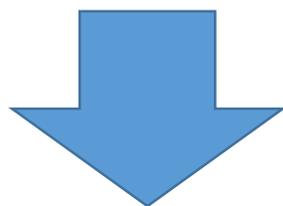
- ④ 専攻医は評価表 (mini-CEX) を記載する。
- ⑤ 外来医 (上級医) とともに診察、IC、マネジメントを見学。
- ⑥ 専攻医は、学生にフィードバックする。

専攻医はその時間は他の仕事が入らないように配慮した。  
(プロテクトタイム)



Mini-CEXの記載

# パイロットで導入



## 若手医師から様々な意見

十分に医療面接はトラブルなく実施できそう

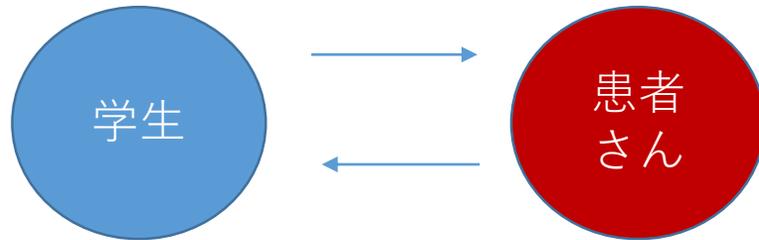
→ 共用試験をクリアしている質の保証

1日2人は大丈夫そう

いきなり1週目から医療面接を実施するのは知識や態度面の習得が未熟である

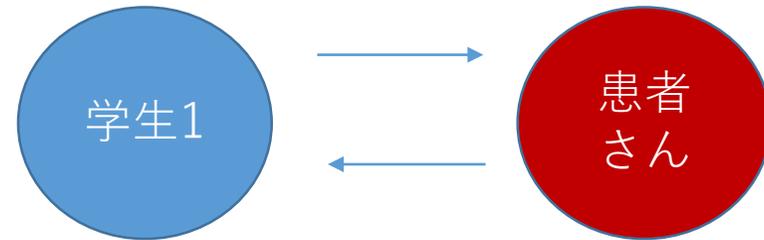
# 医師1名、学生が2人で実習する

パイロット時(学生は1人)



見守り、評価者

現在(学生は2人)



見守り、評価者

学生1と学生2が交代し、2回行う

# 3週間の外来実習の流れ

1週目

オリエンテーション  
医療面接の講義

初診外来、一般外来、産科外来、専門外来の見学、部分参加

2週目

初診外来、一般外来、産科外来、  
専門外来の見学、部分参加

初診外来、一般外来、産科外来、  
専門外来の見学、部分参加

外来医療面接実習  
1日2名

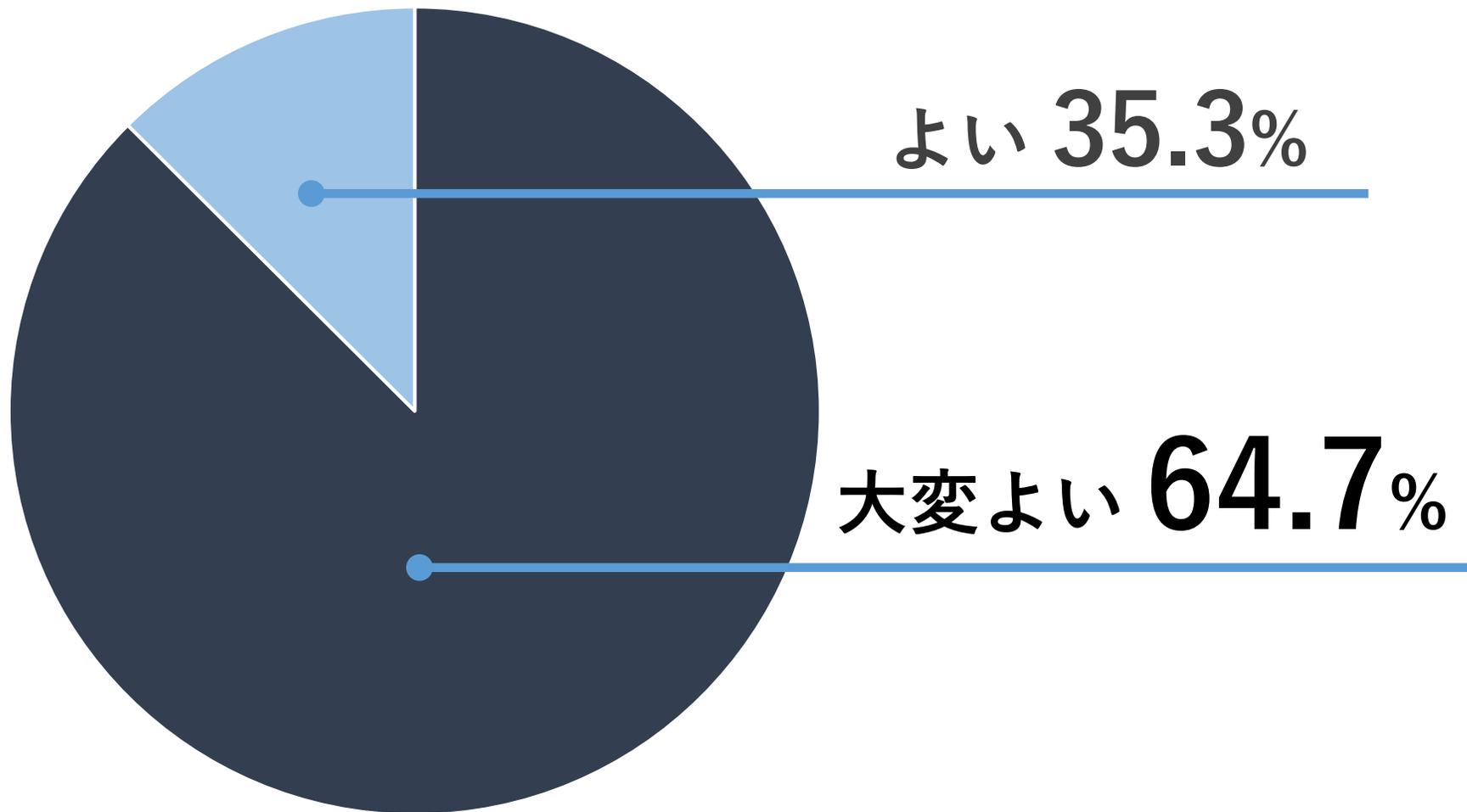
3週目

初診外来、一般外来、産科外来、専門外来の見学、部分参加

外来医療面接実習  
1日2名

まとめ

# 外来医療面接実習はどうでしたか？ (n=36)



# 学生の感想

- 大学病院の実習では予診をやらせてもらえる機会があまりないので、勉強になる場を与えていただき、とてもありがたかったです。
- 産婦人科特有の問診事項である月経歴や妊娠歴について意識しながら医療面接を行うことができたと思います。予診の予習動画を配布していただいたり、先生にも同席していただきながら問診したので取り組みやすかったです。また予診後に診察を見学させていただき、とても勉強になりました。

# 専攻医の声

- 自分では普段経験できない症例を経験し、その診察法、マネジメントやICについて経験することができた。(多数)
- 学生に教育することで自分も勉強しなければならないと思った。
- 予習動画やOSCEのおかげか、医療面接は皆上手であった。
- プロテクトタイムとしてもらったのは大きかった。

# うまくいった理由

準備学習を強化した。

専攻医(若手医師)の活用

→若手医師のニーズも同時に満たす。

実際の医師が行っている業務を任せている。

→学生教育のための業務ではない。

医師のフィードバックもある。

# 課題

「何かあったら呼んで」くらいで実施したいが、学生は経験不足でそこまでには達していない

3週間で2回以上やってもらいたいマンパワー不足。

医療面接を行う場所がない。

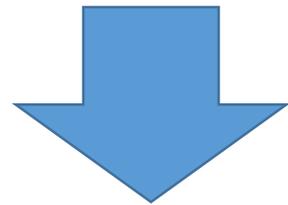
# 新潟大学産婦人科 臨床実習

臨床実習Ⅰ（4～5年生） 10名 3週間  
産科 1.5週、婦人科 1.5週

臨床実習Ⅱ（5～6年生） 2名 4週間  
産科 2週、婦人科 2週

**臨床経験**

**知識、技能、態度の習得は十分**

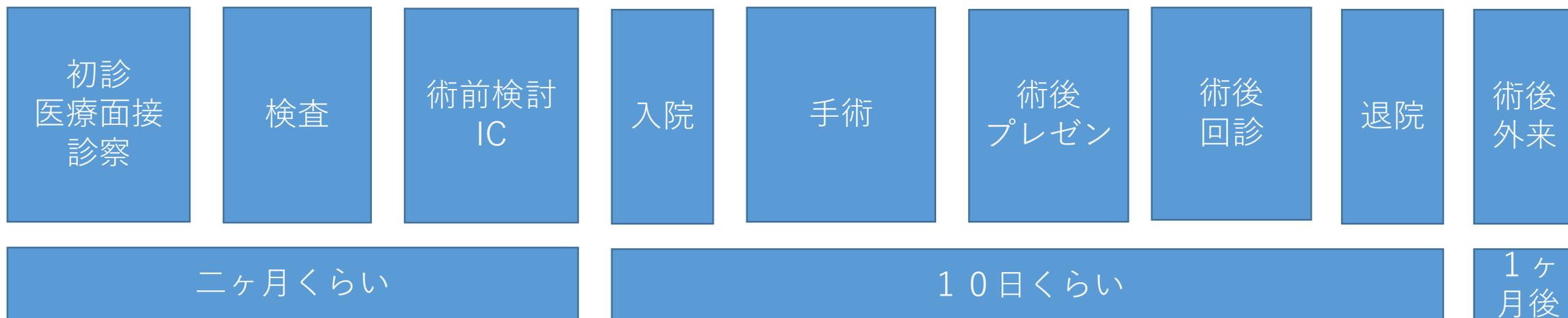


**臨床研修医と同様の実習を**

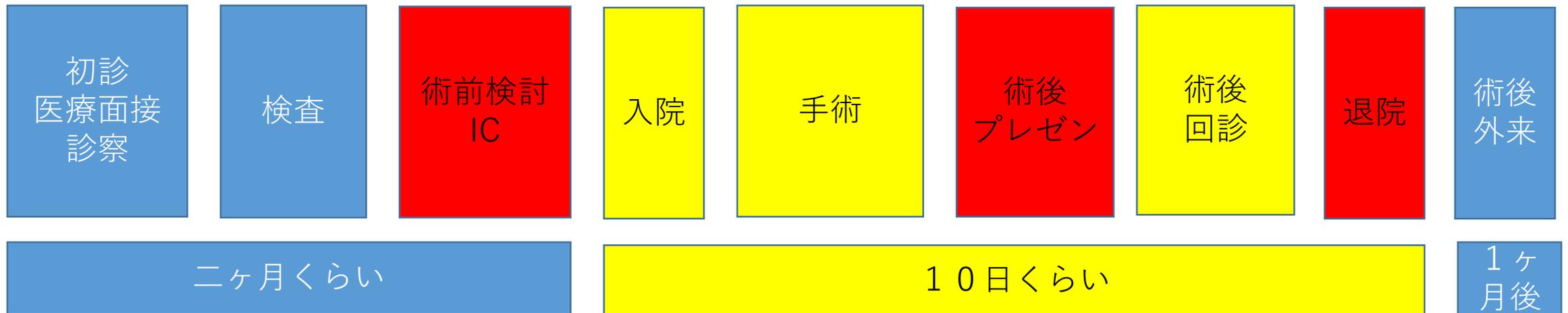
以下の3つを6年生にまかせることとした。

1. 手術の参加
2. 初診外来医療面接
3. 病棟での個人での回診

# 手術の流れのどの部分を任せると 参加度が高まるか？（実質2週間の実習）



# 手術での任せる部分（実質2週間の実習）



複数の症例を経験

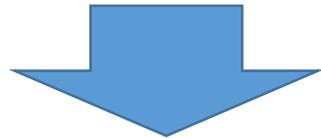
# 6年生になると

## 初診外来医療面接

- ・ほぼ一人で実施可能(いつでもヘルプ可能な状況)

## 病棟回診

- ・担当症例の個人での回診、カルテ記載を確実に実施



5年生のロールモデルに

# Agenda

1. 診療参加型臨床実習の導入の試み
2. **診療参加型臨床実習を増強するもの**
3. 考察と今後の課題

1. シミュレーション教育
2. ICTを利用した教育
3. 臨床研修医の存在
4. 組織としての取り組み

1. シミュレーション教育
2. ICTを利用した教育
3. 臨床研修医の存在
4. 組織としての取り組み

# シミュレーション教育の効果

シミュレーション教育



実際の手術参加

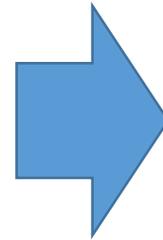
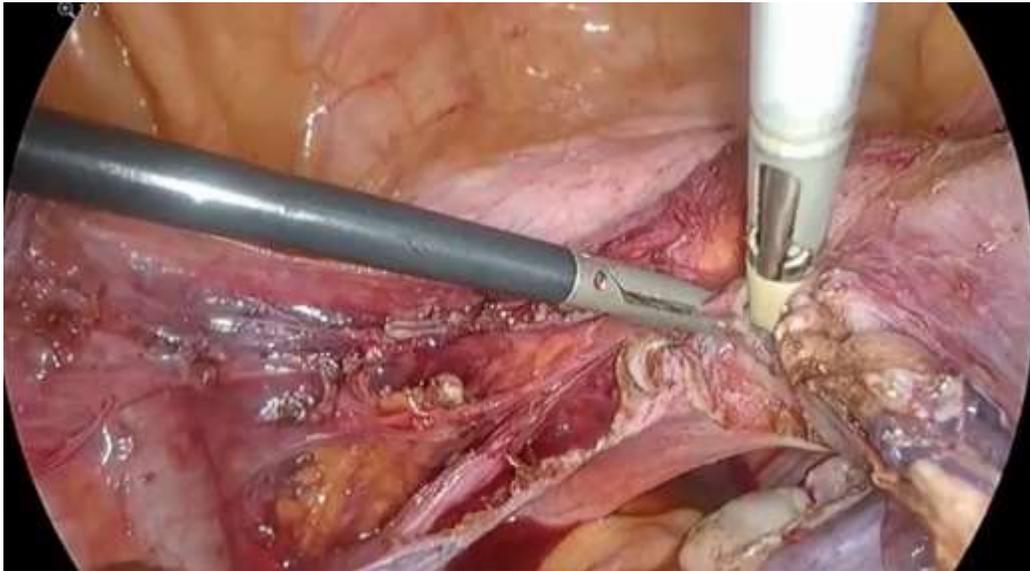


実際の手術で、何が難しいかわかるようになった。  
手術に集中できた。  
先生たちのすごさがわかった。

1. シミュレーション教育
2. ICTを利用した教育
3. 臨床研修医の存在
4. 組織としての取り組み

# 手術予習ダイジェスト動画の導入

手術予習動画



実際の手術参加



実際の手術で、何をしているのかわかるようになった。  
手術に参加できた。  
他の経験していない手術についても理解が進んだ。

1. シミュレーション教育
2. ICTを利用した教育
3. **臨床研修医の存在**
4. 組織としての取り組み

# 臨床研修センター 副センター長として



学生教育は非常に重要です。  
ロールモデルとなってください。

誰が臨床研修医かわかるように

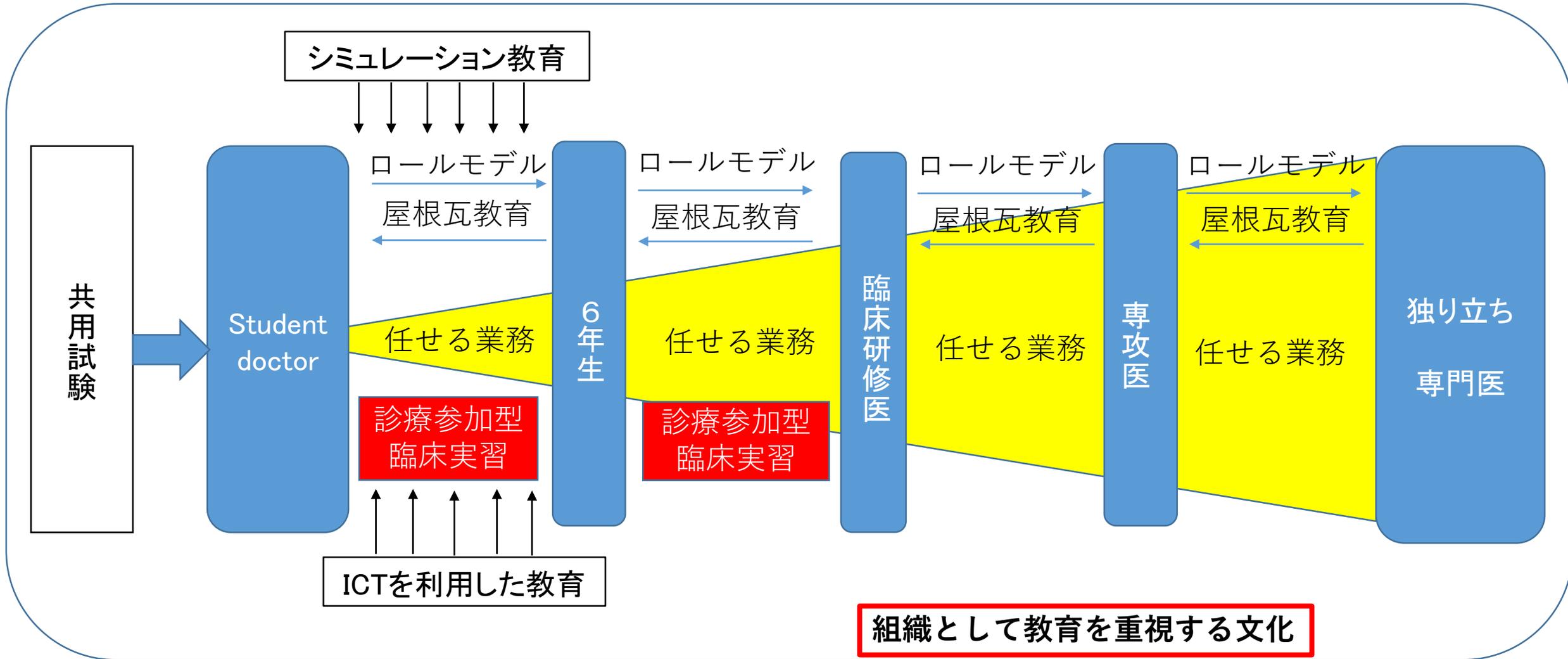


研修医 2 年目

研修医1年目

1. シミュレーション教育
2. ICTを利用した教育
3. 臨床研修医の存在
4. **組織としての取り組み**

# 診療参加型臨床実習



# Agenda

1. 診療参加型臨床実習の導入の試み
2. 診療参加型臨床実習を増強するもの
3. **考察と今後の課題**

# 獲得から参与へ

これまでの臨床実習→獲得(Acquisition)

- 知識や技術や態度などを学習者が「手に入れる」こと
- 手に入れた知識や技術が現場で応用できないこともある

診療参加型臨床実習→参与(Participation)

- 社会の現場における実際の業務の中で役割を発揮すること
- 古典的な学習観である「獲得(Acquisition)」と対比される

# 獲得と参与の対比

獲得		参与
知識/技術/態度の 入手	学習とは何か	日常業務への 関わりの変化
教育方略	必要なデザインは？	役割と経験の支援
試験	評価のしかた	フィードバックと省察

# 参与 (Participation)

3つの段階: 可能な時に下の段階を意識的に目指す

Observing	同席のみで活動には参加しない学習
Rehearsing	学習のために活動の一部を担う
Contributing	臨床業務を共同・単独で担う



徐々に独り立ちさせる

# 課題

マンパワー、時間

→人手不足の診療科はどうする？

科内のコンセンサス

→ある一定の反対意見はある、卒前実習係の調整力、権限

個別同意の必要性

→医師が取得すると思われその煩雑さ

# 課題

短期間しか実習時間のない診療科もある

→3週間から4週間あれば確かによい

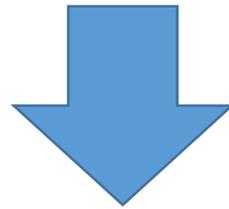
ただ、診療参加型臨床実習を各診療科が導入していれば、2週間程度でも部分的には参加できるのではないか？

→それぞれの診療科で経験を積み重ねていく

→多くの科がそうであれば教える側のエフォートも減っていくのではないか？

# 課題解決のために

診療参加型臨床実習の必要性の啓蒙  
医学部内、各診療科の課題、その解決策の共有  
Good practiceの共有



繰り返しFaculty developmentを実施していく  
医学部内で、市中病院も含めて  
日本全体の問題として全国規模で行う  
全国と同じ診療科どうしで行う

# まとめ

- 新潟大学産婦人科における診療参加型臨床実習の取り組みを紹介した。
- 大学病院産婦人科という状況でも、様々な工夫することで診療参加型臨床実習を導入することは可能であった。
- 診療参加型臨床実習の導入には様々な課題が存在するが、医学部が中心となり、様々な部門が協力し合うことで、大学、そして将来的には、日本全体で診療参加型臨床実習の文化が醸成されていくことに期待したい。